

釧路市教育委員会 平成31年第1回1月定例会会議録

1 日時：平成31年1月28日（月）13時00分から14時20分まで

2 会場：釧路市教育委員会室

3 出席者

岡部義孝教育長

（教育委員）

山口隆委員、松尾千穂委員、種村俊仁委員、小出美貴子委員

（事務局）

高玉学校教育部長、川畑生涯学習部長、高松教育指導参事、
江縁学校教育部次長、藤岡総務課長、高木教育施設調整主幹、
小野施設計画主幹、土江田総括指導主事、仲谷学校教育課長、
米田学校給食課長、澤口生涯学習課長、松本オープンカレッジ推進主幹、
工藤スポーツ課長、佐藤博物館長、古賀動物園長
牧野阿寒生涯学習課長、山田音別生涯学習課長

4 議事録署名人 種村委員、小出委員

5 傍聴人数 0人

6 提出案件

【公開案件】

議案第1号 釧路市立幼稚園規則の一部を改正する規則

議案第2号 釧路市教育委員会公印規則の一部を改正する規則

議案第3号 釧路市長の補助機関である職員による教育委員会権限事務の補助執行に関する規則の一部を改正する規則

議案第4号 釧路市長の補助機関である職員による教育委員会権限事務の補助執行における専決に関する規程の一部を改正する規程

報告事項

(1) 2019くしろ20歳のつどいの開催結果について

(2) 学校の現状について

7 会議内容

【公開案件】報告事項

議案第1号 釧路市立幼稚園規則の一部を改正する規則

議案第2号 釧路市教育委員会公印規則の一部を改正する規則

議案第3号 釧路市長の補助機関である職員による教育委員会権限事務の補助執行に関する規則の一部を改正する規則

議案第4号 釧路市長の補助機関である職員による教育委員会権限事務の補助執行における専決に関する規程の一部を改正する規程

(仲谷学校教育課長)

平成30年第4回12月定例市議会で提案された「釧路市立音別認定こども園条例」が可決され、釧路市立音別幼稚園を廃止することに伴い、関連する教育委員会規則を改正するものである。なお、施行日は、平成31年4月1日である。

それぞれの規則の条項及び別表から音別幼稚園又は音別幼稚園に関連する記載を削除するものである。

◎特に意見はなく、本議案は、原案のとおり承認された。

【公開案件】報告事項

(1) 2019くしろ20歳のつどいの開催結果について

(澤口生涯学習課長)

本年の20歳のつどいは、去る1月13日(日)、コーチャンフォー釧路文化ホール、阿寒町公民館、音別町文化会館の市内3会場において開催した。教育委員の皆様には、大変お忙しい中、各会場にご出席いただき、お礼を申し上げる。

今回の20歳のつどいの参加者数は、3会場を合わせ、男性548人、女性594人、合計1,142人で、対象者数1,692人に対する参加率は67.5%だった。

式典の内容については、釧路市民憲章の唱和、20歳のメッセージ朗読を行ったほか、アトラクションとして、釧路会場ではくしろ蝦夷太鼓保存会による和太鼓の演奏、阿寒・音別会場ではミニライブを行ったところである。

参加者への記念品としては、一般社団法人釧根自動車協会ほか7団体からご寄贈いただいたエコバッグに、記念誌や官公庁からのお知らせのほか、ふるさとにUターンして就職して欲しいとの願いを込め、釧路の企業情報を紹介した冊子を今回初めて入れて配布したところである。

当日は、学校教育部職員の皆様にも会場整理などのお手伝いいただき、大きな混乱も生じることなく、予定の次第を滞りなく終了することができた。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(種村委員)

今回阿寒会場に行ったが、すごくこじんまりした感じで、いつもはコーチャンフォー釧路文化ホールで1000人以上来場者がいて、今回は十数人だったので非常にファミリーな感じだった。また、アトラクションが大阪出身で阿寒に移り住んできた若い女性が3曲ほど歌っていたがすごく良かった。

(小出委員)

音別会場は7人という人数で少なかったが、アットホームな感じで、来賓で来ていた社会教育委員の方が、新成人を小さいころから知っている人で、挨拶するときもお祝いの言葉を実感を持った自分の言葉でおめでとうと言っていたのがすごく印象的で、地域全体で行う暖かい成人式だと思った。

(松尾委員)

私は久しぶりに釧路会場に出席したが、以前の成人式で乱暴な子どもたちがいたときの記憶がすごくあるので、ちょっと派手な衣装を着けている男の子を見ると、見ただけで緊張する感じがあるが、実際には大人しくて、相変わらずしゃべっていたりスマホを見ていたりはあるが、全体的には落ち着いた感じでよかったと思った。過去にアトラクションで蝦夷太鼓の演奏があり、真ん中に大きな太鼓を置いて、締め込み姿の打ち手の方が、演奏していた時はとてもインパクトがあって、二十歳の子たちはみんな口を開けて見ているようなイメージだった。今年も蝦夷太鼓を一番前で見させていただき、子どもたちも大人しく見ていた。大人にとっては蝦夷太鼓は何回か見たことがあると思うが、若い子たちはあんまり見たことがないと思うので印象に残るのではないかと思った。リーダーの草島さんもぜひ会員になってくれと呼びかけをしていたので、そういう意味でもすごく良かったと思った。

(山口委員)

私も松尾委員と一緒に釧路会場に参加した。派手な格好をしている子も一部いるし、もしかしたら気持ちの中にははしゃぎたいと思っている子もいたと思うが、それを防ぐような緻密な大会運営が功を奏して、入場も前の方から整然と入場していたし、騒ぎたくても騒げない、そういう会場管理が良かったのだと思う。そういう部分では生涯学習部を中心に関わっていた方々は本当にお疲れ様でした。本当は例年だと生涯学習部は成人式が終わると、ようやくお正月気分になれるのかなというところもあるが、今年度は国体があるので、国体が終わってからゆっくりしていただきたいと思う。

【公開案件】報告事項

(2) 学校の現状について

(高松教育指導参事)

冬休みも終了し、1月18日（金）より3学期が始まった。

初めに冬休み中の補足的な学習サポートについて報告する。

この冬休みの補足的な学習サポートの参加状況については、小学校参加者の4,898名、参加率41.7%、中学校参加者延べ3,688名、参加率26.5%となった。この冬休みは、胆振東部地震に伴う大規模停電により、冬休みを短縮した学校もあり、また、昨年末には暴風雪の影響で3日間のうち2日間ほど小学校の学力向上サポートが実施できなかったことから、参加者等の昨年との単純な比較にはならないものと捉えている。

真に学力向上が必要な児童生徒の参加については、小学校約80.6%、中学校約55.4%の参加率となったところである。真に学力向上が必要な児童生徒の参加については小学校では、高学年での参加率が今後、工夫の必要性を伺うことができる。

次に平成30年度「北海道教育実践表彰」について報告する。

釧路市立昭和小学校の田崎博久教諭が平成30年度北海道教育実践表彰教職員表彰を受賞した。田崎教諭は、平成29年度より主幹教諭として、学力向上の取組を中心的に進めている。特に、全国学力・学習状況調査や釧路市標準学力検査など客観的な結果をもとに、授業改善の方向性について研修部と協働し改善案を示すほかに、「学校力向上に関する総合実践事業」の推進に取り組み、組織的・計画的な学校改善に尽力している。

また、学習指導において、大学教員と連携を図り、ポートフェリオを活用した小学校外国語活動教員養成に関する事例研究に取り組むほか、釧路管内の小学校外国語活動・外国語の指導に中核的な役割を果たすとともに、その取組の成果を「日本教育工学会全国大会」において研究発表するなど、その実践は高く評価され、今回の受賞となった。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

（山口委員）

教育実践表彰を受賞した田崎教諭について報告があったが、小学校の外国語教育というのは昭和小学校だけではなくて、全ての小学校で重要だと言われているが、田崎教諭は昭和小学校以外の釧路市立の小学校にはどのような関わり方をしていたのか。

（高松教育指導参事）

附属小学校にいたときに、この取組について管内的な指導的な立場で学校を回るなどの役割を果たして、その取組の成果を日本教育工学会で発表したという事でその実績が高く評価されたと聞いている。

（山口委員）

各学校に外国語教育で出張している川崎先生がいると思うが、川崎先生と田崎先生の関係や取組の中での関わりはあるのか。

（高松教育指導参事）

詳しくは承知していないが、川崎先生については3年前から外国語の巡回教諭として3年間ですべての学校を回っているという事で、今年度ですべて終わる。道の事業としての川崎

先生の評価と、田崎先生の活動の関連性についてはわからない。

(松尾委員)

学習サポートの件について、人数が減っているという事だったが、先ほど停電の影響もという話もあったが、ずいぶん数字的には少ない気がするが間違いではないのか。

(高松教育指導参事)

3年前が3日間順調にできたときには、小学校では7, 713名の延べ人数が参加している実績がある。中学校については5, 543名となっている。昨年は3, 519名で、暴風雪の影響で3~4日間あるうちのほとんどが開催することができなかったため、半減以下になったのだと思う。今年については、3~4日やっている学校についてはすべて実施できているが、昨年の停電の影響で授業時数を確保するために、冬休みを短縮して授業日としている学校もあることから、参加体制のカウントがされなかったことが今回の原因になっていると思う。今年の冬の人数と昨年の冬の人数は、全く例年の数字に比べると比較のしようがないと思う。

(松尾委員)

子どもたちは保護者も含めて、この学習サポートに対して、行くのが当たり前とっていてほしいという気はするが、自由に申し込んだりできる部分もあって、そういう言い方についてはどのようになっているのだろうか。

(高松教育指導参事)

学校で真に学力向上が必要な恒常的に来てほしい子については、個別に声をかけたり、保護者に連絡するなど参加を促している。真に学力向上が必要な児童生徒の参加率が80~90%に上がれば効果が上がると思う。また、その他の生徒が参加するのは望ましいことだが、それで参加率が高いと普通の授業と変わらないような体制になってしまうので、一般的な参加については60~70%がいいところではないかと思う。一昨年も7, 700人参加した時には、全体の参加率は40%ほどであった。ただ40%のうちの真に学力向上が必要な児童生徒については7~8割という事で、やはり真に学力向上が必要な児童生徒をどこまで引っ張り出せるかというのが大切だと思う。

(松尾委員)

高学年になると少年団や部活の関係で参加率が少ないだとかそういうこともあると思うが、冬休みの練習とぶつかるというところは、自分が指導している学校では学習サポートの時間は練習を休みにしているが、指導者と学校との連携の取り方等があるのであれば、午前中にしても部活中心ではなくて、まずは学校で学習サポートが必要な子はそちらに行くなどできるのではないかと思うがどうなのか。

(高松教育指導参事)

ほとんどの小学校は午前中2コマくらいとって、1コマはレクリエーション的なものを入れてできるだけ参加させるような意図がある。少年団活動の練習は外部指導者の関係で、なかなか午前中に実施されていないような実態があると思うので、学習サポートと重なって少年団活動に行っているという実態はごくわずかだと思う。

(小出委員)

中学校の学習サポートにおいて、真に学習サポートが必要な声掛けして来てもらう生徒は、個別に授業形式で授業したりだとか、そういう体制も進んできていると思うが、それ以外の希望して来る子は自習形式が多いと思うので、そうすると部活が午前中に入っている生徒は部活を休んでまでそちらに行くという選択はないと思う。自習でもいいと思うが、せめて国語の教室、数学の教室という各科目の教室を分けて、それぞれ専門の先生を1人つけて、わからないところを先生に教えてもらうなどの体制があれば少しは違うのではないかと思う。監督でいる先生も勉強したい科目の先生が必ずいるわけではないし、もし職員室に聞きたい科目の先生がいれば聞きに行けるが、聞けない場合もあるという状況だと、わざわざ学習サポートに行かなくてもいいと思ってしまうと思う。中学校の参加率が低いのはそういうところもあるのではないかと思う。なので、学習会をやっているという名目だけで良いのか、その生徒を上げるためにもう少しできることはないのかと思うが、現実には先生も部活の指導等があると思うので、学習会にびっちりつくことは現実問題厳しいと思う。この体制が変わらないと中学校の受講率は上がらないのではないかと思う。

(山口委員)

自分たちも今まで小学校、中学校を何校か見させてもらって、この学校はうまくいっているだとか、こういう学習会だったら子どもたちにとっても力がつくだろうなとか、この学校はもう一工夫あっても良いのではないかとかいろいろあると思う。前回、前々回の定例教でも良い学校の実践を真似すればいいのに、そういうための情報交換等を積極的にやった方が良いのではないかということは話題になっていたと思う。そのあたりがどのような情報交換がなされているのか、もう少し教育委員会が各学校の学習会の実態を把握しておいて、この学校が良い、このやり方を他の学校でもやれるようにするためにはどうしたら良いかなど、もう少し教育委員会がイニシアティブをとって情報を流すだとか、特に学力実態調査の結果も踏まえながら、先生方の腰が重くてそれがいろんなところに成果として表れていないとするならば、もう少しメスを入れるだとかこの後もそれに関連した意見交換がなされると思うが、特に中学校はあった方が良くと思う。

(種村委員)

自分も学校を見させてもらったが、勉強というのは、生徒を主体でやった方が良く思う。ただ単に休みで時間があるから勉強が遅れている生徒に必要なだからという漠然としたことではなくて、もっと現実的にここが難しいから当然理解できないだろうから来た方が良く、そして具体的にこういった形で教えますよという、さらに具体的な方策のようなものを生徒に打ち出して、学校も部活に支障が出ないようにするなど生徒も来なくなるようなものになれば、参加率も高くなるし内容の濃いものにもなると思う。先生によってプリント学習だったり、一斉的に授業をやっている先生もいる。どうせやるのであれば受講したくなるようなものを先生の方から提供していくのが良く思う。

(高松教育指導参事)

中学校の取組としては、学年体制で取り組むような学校が多いと思う。教科ごとに講座を

開設してやっていくというのが一番学習内容もはっきりして指導性もあると思うが、部活動の関係で学年体制の中で自学自習のような形の補足的サポートというのが未だに残っているのだと思う。今後質を高めていくためには、なかなか全部の教科で講座を開くのは難しいが、少しでも特に課題のある数学等を中心に講座をもっていくような形の学習サポートのやり方というのは、学力向上セミナーなどで広く紹介しながらそのような方向性にもっていく機会をとっていかなければならないと思う。